

教育委員会だより -学(まなぶ)-

(12月1日号)

感性を養う環境

教育委員 宇納 一公

文化の日に2年ぶりに第58回彫塑コンクールが熱田の森で開催され、名古屋市の小中学校の先生方と審査に行ってきました。思い思いのテーマで作られた幼児、小中学生、保護者の方、併せて1,400点余りの力作には、子供たちに人気の定番『恐竜や怪獣・龍』や『昆虫や動物』などが多いなか、今回は親子や仲間の像の他にコロナ収束の祈りを表現したものやオリンピックの競技などをテーマにしたものなどが表現されており目を引きました。粘土が扱われるのは特別な道具や技術はなくても、幼児から大人まで親しめるからです。また、触覚的な素材として様々な造形が可能で、視覚的な中にも触覚的な生命観あふれる良いものが生まれます。一方、どこかで見たような概念的な図形としての形にとらわれてしまった作品もあり、粘土の特長を活かした自由でダイナミックな表現力あふれる作品が少なかったなと思いました。

緑豊かな森の中で日常から離れて半日、親子で会話をしながら粘土制作をして意思の疎通を図ることが出来て、久しぶりの文化の日の休日を楽しまれている人々を見る機会がありました。

新型コロナウイルスの猛威もようやく収まりつつあり、日常生活にも光が見え始めてきました。知立市の学校現場ではICT(情報通信技術)環境の普及とともに教育環境の充実が進められています。学力の向上とともに実体験を通じた活動が減ることのないように、校内音楽大会やスポーツ大会、文化・芸術活動や自然体験、ボランティア活動や国際交流による他国の文化風習を通じた視野の広がりや養う取り組みなど、これからも豊かな感性を育む教育に取り組んでいただきたいと願っています。

